

第 2 講

③ 平安時代の朝廷における儀式と公家の日記に関する次の(1)～(3)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

(1) 10世紀には中央政治の変容にともない、新たな政務のあり方とそれにともなう儀式が整備されていった。醍醐天皇の子、左大臣源高明の著した『西宮記』は一年間の恒例と臨時の儀式・行事と作法、政務の次第などをまとめたものであるが、11世紀前半にまとめられた藤原公任の『北山抄』とならび、院政期以降には政務運営の典拠を示すものとして尊重されることとなった。

(2) 藤原実資は儀式書『小野宮年中行事』を残しているが、実資は重要な儀式を主催するに際して先例を調べ、なお疑問が残る場合には「日記中より証文に備ふべき処を取り出さる」としており、その主張の通り、その日記『小右記』には日々の政務・儀式についての詳細な記事が多くみえる。

(3) 関白兼通の長男藤原顕光は、1016（長和5）年、後一条天皇の即位にともない固関使(注)を派遣する儀式を担当したが、式次第を間違えるなど失態を続けたため、実資には「いちいち失態を書き並べていると筆がすり切れてしまう」と評され、藤原道長にも「究極の愚か者だ」とののしられるしまつであった。また、源経頼は日記『左経記』に「きょうの作法はのちの典拠としてはいけない」と注記している。

(注) 天皇の交代や政変に際して三関を封鎖するために天皇が派遣する使節。本来は軍事的、治安上の重要な使節であったが、このころには形式化し、派遣の儀式が最大の関心であった。

設 問

- A 11世紀以降の朝廷の政務・行事のあり方の特徴を、(1)～(3)の文章を参考に、2行以内で説明しなさい。
- B 11世紀以降の貴族層が「日記」を重視し、自らも盛んに書き続けたのはなぜか。(1)～(3)の文章を参考に、3行以内で説明しなさい。